

「かわいそう」ではございません

福岡県立門司学園中学校3年 小田 孝太郎

二〇二三年六月。我が家にショッキングな報告が舞い込んできた。祖父が運転免許認定講習で不合格となったのだ。理由は、認知能力検査だった。祖父は笑ってこう言った。「免許返納時期がきたと神様のお告げだよ。」と。しかし、家族の不安は的中した。数日後、祖父はアルツハイマー型認知症と診断された。

それから、祖父の生活スタイルは大きく変化した。車での外出がなくなり、人とのふれあいも一気に減るにともない認知症も進行していった。進行を遅らせる薬も飲んだが、地域包括支援センターの方とも相談して、小規模多機能型居宅介護を利用することとなった。様々な介護様式があるが、祖父が可能な限り自立した日常生活を送ることを望んだからだ。

しかし、小規模多機能型居宅介護は、通い宿泊、介護訪問と利用できるため、予想以上に高額な利用料金だった。家族一同不安な中、ケアマネさんの言葉で安堵に包まれた。一割の自己負担と、九割は社会福祉費、いわゆる税の恩恵を受けることができるということだ。「ありがたいよね。でも、孝太郎達が社会に出る頃は、今以上にこうした税金がお給料から控除されるから、かわいそうだよね。」と母が口にした。

確かに、社会科の学習で益々少子高齢化が進み、約二十年後、高齢者一人を一.三人の働き手で支えることになるかと学んだ。しかし、本当に僕達は本当にかわいそうなのだろうか。

その後、前向きに施設に通い出した祖父に、「安心して充実したお世話を受けられるのは、税金の力もあるよね。でも、これから社会に出る僕達は、こうした税金が今より一層増額されるだろうからかわいそうと思う。」と尋ねた。すると祖父はこう口を開いた。「税というと、どうしても多くの人を取られているといった負のイメージがあるからね。『血税』という言葉もあるくらいだから。」と。祖父は、税金を納める立場になった際、『潔税』と捉えるようにしたらしい。それは清潔（クリーン）に税金を使って、みんなが有意義な生活を送ることができるなら潔く納めようと決めたからだそうだ。続けて祖父は、「ゆりかごから墓場までという言葉。これは、イギリスで一生福祉を充実させる政策をとった当時のスローガンだよ。日本も福祉がより充実するために自分ができることは。」と僕に尋ねた。充実した福祉のために、未来の僕にできること。納税者としての義務を果たすのはもちろん、税金を有効に活用できる人を選ぶ選挙に足を運ぶこと。十四歳の僕には、今はこれだけしか思い浮かばないが、将来、税金と真摯に向き合うと祖父と約束した。

日々祖父の認知症は進行し、いつか僕の顔も名前も忘れていくだろう。でも、まだまだ祖父には長生きして今を精一杯生きてほしい。

結びにあたりこう伝えたい。僕達は決して「かわいそう」ではございません。一人一人の税に対する意識で輝く未来が待っていると。